アウトリーチ人権講座 in 100 年ボンド

今回の人権講座も、自立支援施設 100 年ボンドさんでの開催となりました。好評につき連続で講座を開く運びとなりました。会場となっている「100 年ボンド」さんは、ココロの病や生きづらさを抱えた方々の自立を支援する施設で、隣接する農園で自然と触れ合うことのできる施設です。今回は、施設の方々のみならず、関係者の方や一般の方の参加もありました。

今回は、憲法第 1 条の条文を丁寧に読み込みました。会場では、日本国憲法と大日本帝国憲法（一般的には、明治憲法の名で知られている日本国憲法以前の憲法）の条文をそれぞれ配布し、主に、明治憲法と神勅の関係を解説し、当時の文言と現在の第 1 章の「天皇」とが、どのように変化したのかを説明し問題を探りました。

明治憲法の告文には、「皇朕レ謹ミ畏ミ　皇祖　皇宗ノ神霊ニ誥ケ白サク皇朕レ天壌無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ宝祚ヲ承継シ……」とありまして大日本帝国の淵源が「神勅」にあることを法的に宣言しています。「神勅」に由来する「天壌無窮」の「宝祚」とは、永遠不滅の皇位のことで、天孫降臨の日本神話に由来します。それは、天照大神（あまてらすおおみかみ）の孫にあたる瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が天照の命令（神勅）により、葦原の国（豊葦原千五百秋瑞穂国≒葦が豊かに生い茂り、長い年月が経っても永遠に秋になるとみずみずしい稲穂が実る国≒日本列島の土地と人）を統治（支配）するために、高天原から日向の高千穂峰に降り立ったというものです。※女神信仰が淵源なのに、いつから男尊女卑が日本の文化になったのだろう？江戸？

九州宮崎高千穂の天孫降臨神話です。胸躍る太古のファンタジーです。私はファンタジーが大好きで、ナルニア国や指輪、ゲドはもちろん。最近の守り人や十二国記も大のお気に入りです。とにかくファンタジー（空想世界の作り話し）はとっても面白いのです。太古のファンタジーを今に伝える『日本書記』もワクワクする神話ばかりです。「天岩戸」の神話は皆さんも耳にしたことがあるのではないでしょうか、弟のスサノオの荒くれぶりに怒った太陽神の天照が岩戸に隠れたので、世の中が闇に包まれ数々の災いが起こってしまうという神話です。

災いに困り果てた八百万の神々（やおよろずのかみがみ）が天安河原に集り相談し、岩戸の前で宴を開き、踊りの名手「天鈿女命（あめのうずめのみこと）」が面白おかしく舞い、その度に歓声が上がり、それが気になった天照が岩戸を少し開けてそっと覗いた瞬間、力自慢の「天手力雄命（あめのたじからおのみこと）」が岩戸を押し開け、天照を外に連れ出し、世界に光が戻ったという神話です。この力自慢が力士の原型となり神事としての相撲がはじまり、今日に受け継がれているわけです。古から語り継がれた神話（ファンタジー）が現代の宗教行事に継承されているのは事実です。しかし、語り継がれた神話を現実のことだと信じさせ、畏敬崇拝させ、その価値観で全てを理屈づけて国家を建設しようとすると、もはや、それは別物で、宗教国家の誕生物語になります。

憲法学では「超自然的、超人間的本質の存在を確信し畏敬崇拝する心情と態度」を信仰（宗教）と理解します。もちろん、異世界とか生き神とかを信じる信じないは個人の自由なので勝手なのですが、天界があって太陽神がいて、その子孫が世界を支配するという壮大な神の計画（宏謨）の実現を、国家建設の目的であると国がお墨付きを与えてしまうと、そこには法的な宗教国家が誕生するわけです。（『日本書紀（一）』第一巻神代上（岩波書店、1994 年）132 頁）。神に逆らうことは国家への反逆罪です。さて現代、日本国憲法は、主権者である国民が「われらとわれらの子孫のために」日本国を建設したと記しています。宗教国家ではありませんし、政教分離を謳っています。となると、日本国憲法の価値観（国民の自由と平等）を実現するために法的に組織された日本国を「象徴」するために設けられた機関が、もしも特定の宗教だけを表象し、その宗教上の超越者だけを想起させる働きをしていたならば、主権者は、それを憲法に照らしどう評価するのか？これが憲法の問いとなるわけです。つづく。